

編 集 後 記

早いもので第6巻第1号をお届けすることになった。本誌が創刊されてすでに6年目である。毎年の恒例でもあるので早期胃癌を特集したが、今回は特に、つづく第2号の陥凹性早期胃癌との対比の上で、隆起性早期胃癌をとりあげ、幾つかの問題点が浮かびあがるように努めた。

主題を細分して、お互いが余り重ならないようにはしたが、十分の原稿枚数を差しあげられなかったことなので、まずは執筆者の諸先生に御迷惑をおかけしたことをお詫びしなければならないと思う。しかし、一読して頂ければお判りのように、数多くの力作が届けられたことを読者とともに喜びたい。

また、この6年間の「早期胃癌の特集」を見て気付くことは、現在では単に診断といった興味のみでなく、組織発生にまで立ち入れるような、小さな、かつより早期と思われる早期胃癌を基礎に数多くの問題が提起されていることである。

胃癌の組織発生については、胃の診断にたずさわっている日本の医師のすべてで解決してゆかねばならない宿命と期待を全世界から負わされていることを覚悟しなければならない。

また次第に「胃と腸」の英文誌の発刊を期待する諸外国の声が多くかつ高くなっていることを心強く思うとともに、今まで各分野の協調によって進んできた、この胃診断学進歩の美風を一層固め伸ばし、この世界の要望に答えられる日の近いことを期待したい。

<川 井 啓 市>